

北陸地方における飼料の自給について

石川県畜産課 林 正 浩

北陸地方の酪農は、耕地の八〇%を占める水田の上に展開し、従つて飼料の自給も米作部門よりの「稲ワラ」を主幹として発展、土地条件の整備に伴ない、水田裏作による飼料作物の栽培、田畑輪換による牧草の栽培と推移し、酪農の位置も副業的酪農より、米作部門と結びついた併立酪農へと、その酪農の経営形態は変りつつある。

1 飼料自給形態の変遷

a 「ワラ酪農」

北陸の農業は、農業気象、災害の不安を抱きながらも、政府の米作援助に馴れて、米作主幹の構造を保ち、その休閒労働力を完全燃焼させるための副業的酪農形態を示し、その内容は、低生産性のまま存在し、「ワラ酪農」と呼ばれる濃厚飼料と「稲ワラ」の飼料給与に依る不安定な経営形態であつたが、化学肥料、農業による掠奪酷使農業の結果として水田地方は減退の一途を辿り、秋落ち現象が全水田面積の七〇〜八〇%を示すに至り、その上、食糧自給の達成による食糧生産過剰の声さえ聞かれる様になつたので、副業的酪農は漸次、米作併立酪農へと真剣に考えられるようになった。

b 水田裏作の発展

昭和二十六年より積弊・土地改良事業等の施行に伴ない、土地条件の整備と共に、裏作可能面積の拡大が行なわれ飼料作物の裏作が発展して来た。しかし水田裏作の飼料作物として

1 水稲栽培に支障のない作物

- 2 越年性又は一年性の作物
- 3 耐寒性及び耐湿性に強い作物
- 4 栽培管理労力の比較的少なく、容易に栽培でき得る作物
- 5 収穫量多く、経済的に生産できる作物

の諸条件を具備する作物は殆どなく、レンゲ、青刈、エンバク、青刈大麦、蕪菁等狭い種類に限定されて来た。

c 野草地の減少

水田裏作の飼料作物栽培は、順次発展して来たが、水稲作主幹の農業構造は依然崩れず、そのため各作中心の飼料作物の限定された狭い期間以多は、当然野草に依存された。

その間、堤塘、畦畔の草生改良も徐々に実施され、不足緑飼料の充當に努力されたが、何れも収量少く、その上畦畔ブロック化の展開により、酪農民は緑飼料の確保に新しい打開策を見出すべく追いつめられた。

d 田畑輪換の展開

牧草が水稲と有機的に結び付いた水田経営方式が成立すれば、水田地帯の酪農は最も生産性の高い農業構造として確立される。

水田裏作のみでは、種々の苦勞を重ねた酪農民達は、この点に着眼し、水田のもつ有利性、すなわち、灌排水により、簡単に畑地化できる点を利用して、水稲と牧草の計画的輪作方式を取り入れた。これにより飼料の自給態勢を確立、乳牛の多頭飼育による酪農経

営の大規模化、労働力の合理的配分化を図り、そのうえ、水稲の収量増大を成し遂げた。

田畑輪換地における牧草の種類は、ラディノクロバールを中心に、オーチャードグラス及びイタリアンライグラス、ペレニアライグラスで、単播、混播の方法で実施されているが、その一例を示せば、

石川県における水田裏作物作付面積推移 (昭和26=100)

年次	昭和26年	27	28	29	30	31	32	33
大 麦	2,248 (100)	1,620 (72)	1,540 (69)	1,510 (67)	1,370 (61)	1,090 (48)	645 (29)	533 (24)
ナ タ ネ	390 (100)	600 (154)	670 (172)	190 (49)	330 (85)	400 (103)	329 (84)	249 (64)
馬レイ薯	—	80 (100)	64 (80)	120 (150)	95 (119)	70 (88)	71 (89)	65 (91)
レ ン ゲ	12,320 (100)	12,610 (102)	12,080 (98)	12,250 (99)	12,150 (99)	11,056 (90)	10,360 (84)	9,791 (79)
青刈飼料	—	668 (100)	992 (150)	1,001 (151)	1,069 (160)	1,389 (209)	1,486 (224)	2,213 (331)
結球白菜	—	8 (100)	—	38 (475)	—	149 (1,863)	—	149 (1,863)

(石川統調)



石川県金沢市二塚地区におけるラデノクロバールとイタリアンライグラスの混播 (田畑輪換地)

